

昭和のオヤジ

松田妙子

何年かに一度、私の誕生日は父の日と重なります。今年がそうです。「父は永遠に悲壮である」という言葉を残した、太宰治の「桜桃忌」でもあります。父の子どもたちのうちで、一番父に似てると言われながら、最も父の心にそむく生き方をしてきた私は、その符号に複雑な感慨を味わいます。

幼い子どもにとって普通、父親は男性像のモデルとなる最も身近な男性です。私が自分の父を見て作った男性観とは、「男には愛する心がない」というものでした。私の目には、父は親子の情や夫婦愛などを感じない人として映り、男とはそういうものだと思っていたのです。それでいて父は一家の長として、女たちから奉られていましたから、「男とは、愛をもらうだけで、あげなくていい生きもの」。「女とは、あげるだけで、決して返してもらえない生きもの」。——こんな不公平は許せない。だから私は決して男なんか愛してやらないんだ。男とは、男であるというだけで、すでに充分愛されているのだから。女とは、女であるというだけで、親にも捨てられるほどみじめな生き物だ。——私は人生の随分長い時期を、そう信じて過ごしてきました。男には男のしんどさや辛さがあるとわかってきたのは、いつ頃からだったのでしょうか。

「男の子だから泣いてはいけません」と言われて育ち、感情を見せずに黙々と耐えることが男らしきだと教えられ、そのように生きてきた男たち。幼かった私に「男には愛する心がない」と信じさせるほど、父の「男らしき」は筋金入りだったのでしよう。

これは今では笑い話ですが、私が思春期に心を病んで引きこもっていた頃、父の本棚に「話し合わない親と子」という題名の本を見つけたことがあります。そんな本を読むくらいなら、私に一言でも声を掛けてくれればよかったものを！何ひとつ言わず、それでいて、病んで動けない私の将来を思っ、こっそりと私の名義で貯金を積み立てる、そんな父でした。

元々、父と私たち子どもとの間に会話は殆ど成立せず、常に母という「通訳」を必要としました。その「通訳」たる母が認知症になって壊れてから、父には家の中に話し相手が居なくなり、そこでようやく私と年老いた父とは、おずおずと会話をかわすようになったのです。何十年も生き別れになって、いきなり再会した親子みたいな、お互い緊張しながら。そしてようやく私にも、父の「超」がづくほどの不器用さや悲しみが、想像できるようになったのでした。

父は戦争の話は一切しませんでした。母でさえ、父が戦争中どこで何をしていたのか知らなかったのです。母が壊れさせなければ、父は戦時の記憶を封印したまま、墓場まで持って行くつもりだったのでしょうか。父が重い口を開き始めた



のは、ごく最近のこと。

早くに自分の父親を失くし、少年の時から鉄工所で働いて一家を支えてきた父は、機械整備の腕を買われて、戦闘機の整備兵をしていたのです。特攻隊の基地で。それを知った時私は、なぜ父が戦争について口を閉ざしてきたのか、わかったような気がしました。

父と私、二人だけになった家で、「出兵が決まった隊の宿舎は、一晩中灯りがついとった」と言いかけたとき、椅子を引いて立ち上がり、黙りこんでしまった父。頑固で真面目で一徹で、寡黙で感情表現が下手で。モノのない時代に育った人らしく、すりきれてポロポロになった鞆にセロテープを貼って、いまだに使っていたりする父。その鞆と同じくらいしわだらけになった父の姿に、「いかにも昭和のオヤジ」な男の一人を見ます。

と同時に、忘れてはならないのは、そんな憎めない「昭和のオヤジ」たちが戦争に駆り出され、時には虐殺や強姦などの蛮行を行なったということ。私は自分の父が、国内で機械をいじっていただけで、そうした蛮行に加わっていなかったことに安堵したのですが、それだけでいいはずはないのです。殺し殺される土壇場に追いつめられた男たちが大勢いたこと。今は好々爺然としている老人たちの中にも、そうした闇の記憶が沈澱していること。「昭和のオヤジ」を父に持つ世代の一人として、私も後の世代に伝えてゆかなければならない、と思います。

東日本大震災から三ヶ月経った今日、これを記します。

2011・6・11・10PM

それでも

花は咲く

「前田真吹さん福島、石巻報告会」を終えて

真吹さんありがとう。参加してくれた人ありがとう。たくさんカンパが集まって、東北関東大震災いのちつながる資金と名付けて真吹さんに託しました(4万7千円)。

答えは出ないけど、正確なこと知らない自分たちだとわかった。知り続けることだけはしたいと、やれること探す、自分の事だ。やりたくない気持ちもしりつつ、やらないでもいられず…。真吹さんうちにとまって(朝の鐘にもめげず)ゆっくり休めたと言ってくれてほつとした。昨日は夕ご飯も食わずに済ましてしまった真吹さんに朝ごはんをしっかりと食べてもらわないと！で、ゆっくり朝ごはんタイムに色々な話を聞かせてもらった。アフガンで本当に悲惨な戦争の本当を見てしまった。そこから離れることのできない人々、帰る所のある自分。でもそのことは逆に、それまで持っていた漠然とした自分の内なる恐怖心を払しょくした…。一番怖いのはこの現実、人間のしていること。それを見続けさせてくれるのは、出会った人々。つながり続けて行きたい。そういう彼女につながり続けたいと思った。



2011. 4. 21.
松田 妙子